



ファイナンス・イノベーションとは(総論 その1)

～金融市場における止むことのないイノベーション～

フランスの思想家ジョルジュ・バタイユによると、「経済現象」を構成するもつとも基本的な事実は、「太陽が人間に生命を維持する以上の『過剰なエネルギー』を提供したこと」だという。そして、生命維持以上の過剰性は「浪費」もしくは「成長」するために処理されなければならない。「浪費」とは、生贄を捧げたり、家や財宝などを破壊したりすることである。「成長」とは、エネルギーを蓄積し、それを先に移転することで自らを拡張する営みである。資本主義以前の社会が採用したやり方は前者であり、資本主義社会が採用したやり方は後者であった。資本主義とは、この「過剰なエネルギー」を先延ばしするたいへん巧妙な、しかし、やむを得ない制度である。私たちは、経済成長により過剰なものを生み出すのではなく、過剰性のおかげで経済成長を余儀なくされているのである。

ところで、資本主義社会では、「過剰なエネルギー」が貨幣という形で蓄積され纏められて工業や商業に投入された。この社会では、貨幣は将来に備える合理的な手段となり、資本への転化が行われた。この過程で貨幣を貸借する金融市場が出現したのである。

金融市場は、大恐慌や戦争を何度も経ながらたえずイノベーションを作り出してきた。当初は投資資金の募集と貸出だけだったのに、資本主義の発展とともに株式や為替の取引を生み出し、その次には先物取引やレバレッジを生み出した。また、原油や農産物の投機的取引に続いて様々なデリバティブを生み出した。住宅ローンも証券化されて複雑な新型の金融商品へと作り変えられた。

もともとデリバティブとは、もともとなる金融商品からリスクをヘッジするために派生した金融商品であるが、いまでは枝分かれするように派生が派生を生み出していった結果、必ずしもリスクヘッジするものではなくなっている。

さて、金融市場は蓄積された貨幣の流通を円滑に行うことで経済成長に寄与するために出現したものであるが、現在はそのようになっているであろうか。過剰性の貨幣はもともと具体的なモノの有用性には対応していない。その意味で過剰性の貨幣は、最終的にモノには還元されず、直接いつその過剰性につなげられる時がある。その極端な姿が投機であり、金融市場の発達がこれを可能としている。経済のグローバル化は、これを世界規模で可能としている。経済成長とは無縁な姿であるが、リスクをヘッジするためにさらに金融イノベーションは生み出されていくだろう。

私たちはいまこのような金融市場から資金を調達して事業活動を行っている。この金融市場の特性と行く末をよく理解して活用と対応を行っていかなければ、企業の存続と成長・発展は実現できないと考えざるを得ない。

*本コラムは、「経済学の犯罪」(佐伯啓思氏、講談社現代新書)を参考に私見を述べたものです。